

## 伝説めぐり

「イサムくん。もうすぐ着くよ、準備してね。」

電車の中で、軽く肩を揺さぶられて僕は目を覚ました。

「はい。大丈夫です、すぐ降りられます。」

「了解。ホームから富士山見えるらしいから、降りたらまず写真撮ろうか。」

「わかりました。」

作家志望の男、カンの首には昭和を思わせるレトロなカメラストラップが掛かっており、手には「伝説めぐり」と題した綿密な旅行計画書が握られていた。

僕が富士吉田に来たきっかけは大学の初回授業で自己紹介をしたことだった。そこでは好きな曲を発表する流れになったが、流行りの曲がわからない僕は童謡の「ふじの山」が好きだと言った。その時から、カンはずいぶん僕にやたらと話しかけてくるようになったのだ。

彼が言うには「ふじの山が好きとはセンスが良く、芸術の才能がある」らしい。その言葉の意味はいまいちわからないが、兎にも角にもこの男は僕を作家にさせようとしてくる。今回の旅もその計画の一環のようで、どうやら僕が富士吉田の文化に触発されて芸術に目覚めることを本気で望んでいるらしい。

「イサムくん、もう少し笑顔の方が良いかな！」

「は、はい。というか、カンさんは映らないんですか？」

「僕はいいよ、これはイサムくんの旅だから。あと、カンって呼び捨てでいいよ。ペンネームだし。」

「僕の旅…言っていることがよくわかりません。」

「とにかくもう少し、笑顔で。」

「はい。」

カンが満足のいく写真を撮り終わると、僕らは改札を抜けて上吉田の町に出た。そこは、何ら特別な建物があるわけではなかったが、背の低い住宅屋根の向こうには山の輪郭が見えてのどかな雰囲気だった。

「それで、始めはどこに向かうんですか？」と、横目にカンを見て尋ねた。

「最初に見たいのは金鳥居だね。駅からすぐ近くにあるよ。」

そう言って彼は手描きの地図を取り出し、案内人のような足取りで歩き出した。カンのレトロな服装は、街の少し古びた街灯に不思議とよく馴染んでいた。

「あれだ、金鳥居。」

少し歩いた先の曲がり角で、突然カンが立ち止まった。その先には富士山を望む大通りがあり、道路をまたぐように金属製の鳥居が立っていた。

「これ、銅でしょうか。年季が入っているようで時代を感じます。」

高くそびえる鳥居は、長年風にさらされたことで淡い緑に変色していた。

「まさしく、唐時代の中国から伝わった青銅だね。当時は『唐金（からかね）鳥居』とも言われていたらしいよ。」

「独特な色が空に馴染んでいて綺麗ですね。これって、富士山への入り口みたいなものでしょうか。」

鳥居が富士山と街の景色を取り囲む様子から、なんとなくそのように感じた。すると、カンが何やら嬉しそうにニヤニヤして、僕の顔を覗き込んだ。

「イサムくん、いい目持ってるね！」

「なんですか、急に。」

「この鳥居には富士吉田の人達が大事にしてきた想いが込められてるんだよ。」

「想い…ですか？」

何を言いたいのかすぐにはわからなかった。しかしこの時のカンの声は普段と違ってどこか真剣だった。

「たとえば神社にある赤い鳥居は、魔除けをして神様の住む世界と僕たちの住む俗世界を分けるためのものなんだ。そしてイサムくんの言うとおりに、この金鳥居も同じように富士山の信仰世界への入り口になってる。富士山への畏敬の念や信仰心を表す意味があるんだよ。」

「鳥居ができるまでの歴史、みたいなことですか。」

「歴史もあるけど、もっと言えば意味かな。この鳥居は何度か建て直されているらしいけど、世代を超えても目的や役割がしっかり受け継がれてるよ。」

カンの言葉を聞いてからもう一度鳥居に視線を移し、中に映る富士山を見上げてみた。世界を隔てる、と聞くと心なしか鳥居のある場所を境に街の空気感が変わっているように感じた。

「なんというか、ただの絶景スポットだと思ってました。」

「絶景だと思うのにも何かしら理由があるんだよ。それも君の感受性が豊かだからさ。」

「またそれですか。別に僕は作家になろうとは思ってませんし。」

「いいや、僕がさせるからね。」

僕の感受性が豊かだというようなことは、これまでも何度もカンに言われていた。

「そもそも、その意味っていうのは小説と何か関係があるんですか。」

「そりゃあもちろん！言ってみれば、それが僕の美学だからね。小説に限らず、芸術というのは全部人が感じる意味の世界だと僕は思うんだよ。」

そう言うと、カンはずきずきとした目で鳥居を眺めた。

あまりに真っ直ぐな主張にしばらく言葉を失った。

「…そういうの、カンさんらしいですね。」

「そうかな？イサムくんは面白いと思わない？」

「まあ、多少は。」

カンは満足そうにうなずいた。

「多少感じたならセンスありだね。じゃあ、次のスポット行こうか！」

「…はい。」

相変わらず、一方的な人だった。

次に、僕らは富士山にまつわる神社を目指して道を登っていった。

カンは再度ポケットから折りたたまれた地図を取り出した。地図の線はやや滲んでおり、カンがめぼしく感じた場所や建物が書き込まれていた。一方で僕は駅前の観光案内所で受け取った色刷りのきれいな地図を持っていた。

「次は通りをまっすぐ行ったところの浅間神社だね！」

カンが指さす方角を見た。どこか違和感を覚え、思わず首をかしげた。

「あれ、逆じゃないですか。神社って北の方じゃ…」

僕らは立ち止まってお互いの地図を見比べた。

同じ地名が書かれているのに、どこか噛み合わない。どうにも腑に落ちず目を凝らしていると、上りの道から風が吹き地図の端をふると揺らした。その時、地図の上部に描かれた富士山の絵が目に入った。

「あっ、これ。」

思わず声が出た。

「これ、富士山を上にして描いてます。ほら。」

カンは目を丸くし、僕の地図を覗き込んだ。

「ほんとだ。うわぁこれ、すごいな。」

そう言い、嬉しそうに地図を指でなぞった。

「街の人たちは方角を南北で見るよりも、富士山を基準にする方がわかりやすいんだろうね。」

「なるほど、そういうことでしょうか。」

カンの言葉を聞き、地元の人たちが「山の手前」とか「富士山から見て右」なんて言いながら道を教えている姿を思い浮かべた。

「地図って面白いんだ。ただ案内をするだけじゃなくて土地の人が何を大事にしているかが表れてくる。何をどんな大ききで描くか、どんな色で描くかってところにもね。」

「聞いたことあります。地図を専門に研究をする学者さんもいるんですよ。」

「そう！まさに、地図は大事な歴史資料でもあるんだ。その地図ができた時代に、人が世界をどう見ていたかが一目でわかる。この町では富士山は上に描かれるものなんだ。それにはとても深い意味があると思うよ。」

「これにも、意味…」

含みのあるカンの言い方に、少し考えを巡らせていた。あたりを見渡すと、奥にそびえる富士山が目に映り、自然と視線が高くなっていることに気がついた。

「町の人にとって富士山が“見上げるもの”だからでしょうか。富士山を神様のように慕っているから、上から見守られるみたいになんかちょっと安心するのもかもしれません。」

「それ、すごく良い見方だよ！」

カン目は細めてうなずいた。それから、再び僕らは地図を見て改めて神社のある方角へと歩き出した。ついさっきまではただの案内図だったこの地図が、途端に鮮やかに写って見えた。小さな地図に収まるよう選び抜かれて描かれた建物や町並みは、この土地の人々にとって大きな意味を持つものだと思うと、なるほどなと思った。反対に、町で見つけた立派な建物が地図には描かれていないと、どこかやりきれない気がして地図の余白に書き足してみたくになった。地図を片手に歩いているだけなのに、自分でも意外なほど色々な喜びや葛藤を感じていた。

そうして20分ほど歩くと、僕らは富士山の麓にある富士浅間神社にたどり着いた。木々と石灯籠に囲まれた参道は進むごとに空気がひんやりと変わり、苔と樹木のしっとりとした濃い香りが立ち上ってきた。奥へ進むにつれ、先に見た金鳥居よりも一層巨大な鳥居が姿を現した。赤く塗られた木製の鳥居からは、さっきとはまた違った不思議な暖かさを感じた。

鳥居をくぐるといくつもの建造物が見えてきた。道の脇にはひっそりと小さな社があり、薄暗い森の光がかかる姿が神秘的だった。正面には、屋根のついた重厚な門のような建造物もあった。柱には細やかな彫刻がほどこされており、神様の姿をかたどったようだった。

これら一つひとつの建物にも、特別な意味があるのだろうか。思えばこれまで

神社を訪れることは何度かあったが、建物や所作にどのような意味があるのかは知らなかった。それでも参拝をすると心が浄化されるような気がして、いつも自然に手を合わせていた。「絶景だと思うのにも理由がある」というカンの言葉が頭の中で静かに響いていた。

「カンさん、せっかくですしあそこで手を清めていきませんか。」

少し離れたところにある手水舎を指して声をかけた。そこでは、一人の老人が木樋から流れ落ちる水を掬い、ゆったりとした動作で手と口を濯いでいた。

「いいね、行こうか。」

カンは嬉しそうにうなずいた。境内の穏やかな雰囲気からか、お互いに自然と声をひそめていた。清潔を保つため、数年前から手水舎には柄杓をおいておらず、こうしてこぼれ落ちる水を手ですくって清めているらしい。僕は冷たい水で手を流した後、少量を口に含んで清めた。

次にカンが手を清めている間、水が流れ落ちるのを見つめていると側から穏やかな老人の声が聞こえてきた。

「若いのに、丁寧に行っているね。」

驚きつつも軽く会釈をすると、老人は続けた。

「この水、綺麗でしょう。富士の水だから、すごく澄んでる。」

「富士の水ですか？」

そう尋ねると、老人はゆっくりとうなずいた。

「このあたりの水は富士の湧き水ですよ。女神様の恵みです。」

「女神様ですか？」と、カンが顔を上げた。

「ええ。<sup>コノハナサクヤヒメ</sup>木花開耶姫、という富士の女神様です。桜の花が咲くような美しさからその名が付いたと言われておりまして、江戸の昔から慕われていました。富士山はもともとは火山でしたから木花開耶姫さまにお願いをして、お怒りを鎮めてもらっていたんです。」

老人は、幻想的な物語を誇らしく語り、静かに微笑んだ。カンは目を輝かせて聞いていた。人々が富士の山を女神様に見立てて慕っていた。そんな物語があることを知ると、ふと辺りの建物が手の込んだ贈り物のように見えてきた。木花開耶姫がいたのは遠い昔の話のはずなのに、今でもその姫への祈りのようなものが空気の中に息づいているように感じた。少し間をおいて、カンが尋ねた。

「木花開耶姫というのは、この神社の御祭神でしょうか。」

「ええ、まさにそうですよ。」

僕たちは夢中になって木花開耶姫のことや富士山の噴火のこと、この神社がいつからあるのかなどを次々に尋ねた。老人はその都度ゆっくりとうなずき、語り続ける老人の言葉の奥には長い歴史の中で人々が富士を畏れ、同時に愛してきた心のかたちが感じられた。

「ありがとうございます、たくさんお話が聞けてよかったです。」

「いいえ、わざわざ遠くから足を運んで下さったんですから。」

二人で同時に頭を下げ、手を振ってその場を去った。境内を抜けると、空は夕暮れでもう薄暗くなっていた。

神社を振り返ると、傾きかけた陽が社殿の屋根を照らし、わずかに輝いていた。この時、神社を離れるのが少し惜しく、富士の歴史や物語をもっと知りたいと密かに感じていた。すると僕の気持ちを見透かしたようにカンがこちらを見て言った。

「最後に、博物館にでも行こうか。」

「え？」

思いがけないカンの提案に驚いた。計画書にはなかったのだ。

「いいんですか？でも、カンさんの計画では次は…」

「いいよいよよ、大丈夫。もともと博物館も調べて気になっててね。町のちゃんとした歴史や伝承を知るにはやっぱり一番いい場所なんだ。イサムくんももっと知りたいと思ってね。」

カンは少し微笑んで僕が返事をするのを待った。気持ちを見透かされて少し照れくさかった。

「はい、行きましょう。」

地図を見ると、富士山を正面に見て左へ寄ったところに「ふじさんミュージアム」があった。思えばこの伝説めぐりの旅は最初、観光の延長くらいに考えていたはずだ。それなのに、実際に各地を巡り、物語に触れるたびにどこか心の奥が満たされていくような感覚があった。

カンは、相変わらずの軽い足取りで僕よりも前を歩いていた。出会った当初はよくわからないヤツだと思っていたが、今ではその文芸への純粋な好奇心にも共感できるようになっていた。

「あの、カンさん。」

声をかけると、カンはすぐに振り返る。

「どうかした？」

「最初に呼び捨てでいいよって言われたの、覚えてますか？もしよかったら、

呼んでみたくて。」

「もちろん！その時も言ったけど “カン” って僕のペンネームだからね。」

「…じゃあ、カン。今日は予定を立ててくれてありがとう。正直、最初は楽しめるかどうか不安だったけど来てよかった。知らない世界をたくさん知れて、なんだか僕の人生で特別なものになりそうだよ。」

自分で言いながら、頬が熱くなっていた。

「いや、いい雰囲気だけどまだ終わらないよ！今から博物館にも行くからね！」

カンは照れ笑いを浮かべて軽く僕の肩を叩いた。つられて、僕も自分の言葉がおかしく思えて笑ってしまった。いつの間にか友達として、自然と笑い合える関係になっていたことを嬉しく思っていた。

そうして二人で歩いていると、夕暮れの羊雲の下にそびえる富士山が姿を現した。空の青が深まり、山の輪郭は淡い紫に縁どられていた。その時、ふと旅のきっかけになった「ふじの山」の一節を思い出した。

青ぞら高くそびえたち  
からだに雪のきものきて  
かすみの裾を遠くひく  
ふじは日本一の山

横目に歩くカンを見ながら、静かに感動していた。子どもの頃は単なる情景描写だと思っていたが、今こうして富士を見ると、女神が衣服をまとって風にたなびかせているような気がした。昔の伝説は、建物や伝承の中で今もそっと息づいているのだと知った。そのあと、僕たちはふじさんミュージアムを夢中になって見て回った。

——午後の陽が傾き、建物の影が長く伸びていた。

伝説めぐりの旅は終盤に差し掛かり、僕らは再び駅へ向かって歩いていた。

「楽しかったなあー！」

と、カンが大きく伸びをし、深く息をはいた。

「だね。結構歩いて疲れたけど、すごく気持ちが良かった。」

「やっぱり空気おいしいからかなあ。」

「そうかも。」

少し笑って僕はうなずいた。旅の余韻で胸の奥が温かく感じられた。

しばらく歩くと、少し先に富士山駅のビルが見え始めた。

「…カン、今日は本当に楽しかったよ。なんとなくだけど、今まで知らなかった世界がたくさん見えたような気がする。」

「本当？そう感じられたら上々だよ。」

カンも満足そうに笑みを浮かべた。

「今まで、自分に見える世界だけが世界だと思っていた。けど思ってたよりも、場所とか文化によって世界の見え方は変わるんだなって感じたよ。」

「そう！僕もそう思うんだ。いろんな神話や物語に触れる度に、こんな見方があったんだっていつつも驚かされるんだよ。」

カンは食いつくように、活気にあふれた声を響かせた。

「それでいうと、カンが小説が好きな理由もわかる気がするよ。小説も、一人一人が感じてる意味の世界なんだよね。」

「そう、そうなんだよ。作家にはそれぞれの世界があって、僕はその旅をするのも好きなんだ。」

とうとう改札の前まで辿り着いたとき、突如カンが僕の方へ向き合った。

「イサムくん！君にも君の世界があるんだよ。それをそのままに言葉にしたら、僕は絶対おもしろいと思うな。」

カンの言葉は、その後も僕の頭の中に残り続けていた。

伝説めぐりの旅は、カンが僕を作家に仕立て上げようと計画したものだだった。

これが直接のきっかけとなったのかどうかはよくわからないが、実のところその数ヶ月後に僕は一篇の短編小説を書き上げてしまった。どうにも照れくさくて、カンにはまだこのことを話せていない。僕は彼に倣って、自分の名前を音読みするペンネームをつけた。

だから僕の最初の作品は『フジヤマの少女』、作者は“坂下ユウ”となった。その文字を見るたび、僕はこそばゆい気持ちになった。